大正十二年十二月二十四日第三種郵便物認可 毎月一回十五日發行
大正十四年五月廿日印刷納本 大正十四年五月廿五日發行

光

第四十一輯

大正十四年五月

◆金的は射にくきもの……西田天香
◆藝術美以上に美しきものへ……谷口雅春
◆筑紫夜話(その二)……柳原舜䎽

同人懺悔報恩の奉仕者
祈願 不二の光明によれる生活
費用 供養されたる浄財

◆托鉢を受けて(二)……星 進
◆天香さんの車ひき……K H 生
◆如風來如風去……住田蓮車

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の淸規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生產業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは個中の消息、もとより言辭の擧說し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家、治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

金的は射にくきもの

西田天香

現に往きつまつた問題になやまれる時に、その人の爲めにその場所で答へさせてもらふことなら、割合無難に言葉が出る。その人も能くわかり喜んでもらひ、それで心が明るくなり、時にはおひかりの偉大さを徹見される事さへある。それが妙なもので、それと同じことを同じやうな問題をもつ他の人に云ふたとて多くは役にたゝぬ、ほかの時に云ふてもそれ程にひゞかず、又時には場所がかわつただけでもしつくりせぬことがある。人の心の金的を射拔くのは極めて狹い範圍の僅かの時間に限られてあるものらしい。

世に不朽の金言は澤山ある。けれども時代にあわぬと忘れられてゐる。それに反して、大した言葉でないものでも、時がひつたりした爲めに、大いな刺戟となることもある。甲の國に適當な思想が乙の國にはあてはまらず、同じ民族が同じ時に、同じ問題に當つてゐても、扱ふものゝ心の流れ工合で皆それ〳〵の分裂相をあらわす事を見る。こふした場合には受ける人の心が金的にならねばならぬ事ともなる。どの樣な小さい金的でも射留めるといふ反對に、どんな矢でも受け留める金的の樣なギリ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

〳〵の心になることも亦極めて狹い範圍と僅かの時間に限られるらしい。

どの樣な言葉でもそれを生命の糧にする人は善く受ける金的の人である。どの樣にふら〳〵してゐてもこの人の持つ金的を射留める人は善く射る名人である。此何れかでない時に、大抵の言葉や文章は、其最高能率を擧げ得ない。勿論此最高能率を中心にして幾分づゝの能率を擧げることの出來るものもありはしようが、是等は皆只ヱリ（魚をおひよせる湖中の漁具）の遠卷に類するものである。或は準備ともなりまた方便ともなろうがもし本ヱリ（最後の魚のよる中心）を持たないやうな、即ち生命をねらわない亂射は役にたゝぬ。是は物と心の濫費である。濫費ぐらいに止まらず隨分澤山な弊害もある。言ふものも聞くものも書くものも讀むものも、能く〳〵注意をせねばならぬことである。

殊に困つたことは、最大切な言葉は最危き言葉であることである。それが宗教上の事になると一段とそうである。『是は誰れにでも云へぬ事であるけれども』など、前置きして、大切な宗教上の事を云ふことがある、別に是が人の惡口や陰謀でなく、極めて公明正大の事でありながら、その人のその時のみに限つて、云ふたり聽いたりすることがある。是は已むを得ぬ事で、又そうでなければならぬ事なのである。宗教上でなくて世間の事にも秘密がある、官署會社の書類にも「秘」「極秘」などゝ、嚴めしき判の押したものもある。陰謀などは無論の事その他少しでもよからぬ事に用ゐるのは善くないが、正しい事なら秘密も必要なことがある。是は世間に正しからぬ心の人が澤山あり、つまらぬ事を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

考へるものが少くないから、是等の爲めに、多くの人の爲めにする正しい事を破られぬ爲めの用意である。どの宗敎にも秘言がある。その境地に至らぬ人に聞かせると、反つて邪見をおこすからである。佛の說法には常に聽衆を撰擇されてある。開山などの語錄にもそうしたものが大抵はあろう。開山などは皆何れも越格の人である。飛躍の境地が體驗されてある。何人も最後の救濟には、皆此飛躍の境地が要る。百尺の竿頭を一歩をすゝめる時、善惡を超越する。それが世間の倫理を少しも蹂躙せぬのは無論である。否その境地をハッキリ持つものにして始めて世間を成就し、倫理を組立て、又實踐する事が出來るのである。此境地に入るときに又それを說明するときに、一度はあぶなく見える言葉が要る。若しも聽く人が力がないと邪見に落ちる、說く人にも注意を缺くと邪道を行じたことになる。

殊に現代は理窟を好む、論理的といへば高尚だが敬虔の念を缺けば理窟づめになり易い。智的になり研究ずきになつた現代人の心には、一方に自然を征服するといふ樣なうぬぼれと、何事でも讀み、聽き、考へ通そうとする風がある。頭腦文化とでもいひたいやうな處がある。腹の力、如意の珠、無心、非思慮、無邪氣などを大切にしない。若し頭腦にのみよらば、如何なる大家も到底宇宙と一つにはなれない。或は腦亂しまたは窮塞する。如何に宏大なる思想も一人の魂をも救へずに終るかも知れない。況んや平凡なものが破戒無慙の行ひや、慾にとらわれた生活をしながら、徒らに高處の事を聽き又讀みあさるのは危いことである。又大家でもないものが能く對機の如何をも考へないで、輕々敷

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

云ひ又書きするのも同じあぶなさを持つてゐる。たゞの一句でも善く扱へば法が活き、あしく扱へば法がすたれることもある。

眞宗の歎異鈔なども秘めて見せなかつたものらしい。今の人はすぐに歎異鈔々々といふ。眞宗をいふ人歎異鈔を讀まぬはなく、歎異鈔をよむ時人はすぐに安心決定し、不斷煩惱得涅槃となる。それはそれでよいはづである事もある。併し歎異鈔に書いてある通りを鵜呑に讀み、手輕に「成程」と合點したのでは、決して眞髓がつかめるものではない。たとへどれほど頭でうまく扱ふても、不思議なことには行相がとゝのはぬ。其一つは少さくても開山上人の樣な生活振りになりそうなものがそうならぬ。第二に上人の樣なほんとの落付きが低いなりにも出そうなものだが、それも見えぬ。私は歎異鈔の如きは只眼で讀むべきものでなく腹で讀むべきものと信じてゐる。「同じ眼でよんだのだが、こんど讀んだら別の味がした」などと云ふ事がある。全くそうである。字を腹で讀み文を如意味で味はねば、上人などの金句はわからぬ。それをだゞくさに讀むならば、多くは己れの氣儘を辯護させようとすることになる。「何を力んでやつて見たとて出來ぬでないか、又どんな大きな事をしたとてそれが何程のことか」と云ふ人もある。その言葉は惡くはない、が、それを己れの懈怠の辯護にする事が多い。力きまずに、爲るとも思はないで、報恩のおもひ感謝のきもちでやれる事もある。何程の事をしたともほこらずにしたことが、自然に人から大きな事と思はれる樣な仕事の出來てる人もある。祖師

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

上人の紙衣の九十年の生涯はこれの大きなもので數々の妙好人はその類の小さいものであるらしい。此種の人は、同じ「何を力んで云々」を云ふても内容がちがう。又一つは生活の上にビク〳〵してゐる樣に見えて、祖師上人や妙好人の樣な面目が少い、大死底に臨んでも同じ事がいへなくては徹底せぬが、この樣な人ならば決してゆきつまりの生活をそのまゝにして「何を力んで云々」とは云わないと思ふ。こうした事にわる落ちするなら、歎異鈔は或程度は秘めておいてそれを讀み得る體度を錬り上げる事を怠らない必要があるのでないか。またたとへ公開されてあつても讀む時の心の用意を互に心すべきでないか。

私は法然上人が、法華經を讀むことについて、「法華經は淨土に往生して彌陀觀音勢至などと共に讀みたい」とか、「讀め」とか云われたことを何かの書で讀んで、その用意の周到懇切なるに恐れ入つたことがある。「淨土に往生して云々」は必らずしも此肉身の死を指すものとは思はない、併し淨土をあまり低級に主觀する事を許したくない。箇中の消息のハッキリわかる人に云ひたい事でわからぬ人に云ひたくない言葉！。法然上人は矢張愼重に「淨土へ往生してから云々」として秘められたのであると思ふ。勿論其時分と今とは時代もちがひもする。併し「信ずる心」などは必らずしも進んで居まい。智の進んだだけ箇中の消息も智的になる。理がつまつて味がへり、智解が整ふても生命が出ない。うつかり法華經をよんで法論に花をさかすことにもなる。「私は法華經が分りませいで」とひれ伏

すとき、その人格の後ろに法華經の光りがかゞやきそのひれ伏す人を包みて立派な信格の人とする事がある。又その反對に『我こそ法華の行者なり』と云ふ後から、佛の叱憐を受ける人もある。讀んだといふ人讀まず、讀みませぬといふ謙虚な體度が經其物になつて居ることもある。釋尊が法華經を説かれた時も澤山にある聽衆を去るに任せてヽスグラレヽたでないか。

弘法大師は更らにハッキリ是々は密部なりと危い部分を宣告された、果上の境涯を傳へて宜しいとなつたものだけ傳授された。ほんとの事を知りほんとに人を救わん爲めには、二二が四といふ樣な單純な事ではゆかぬ。線から平面に、平面から立體にと行居かないでは人と世とは救はれぬ。物知り顔や獨よがりの心では常にあやまちのみを殘す。私はこうした事を思ふてゾッとする事が少くない。獨り弘法、法然、親鸞の三祖師のみならず、各宗開山敎主などの苦心は一通りや二通りのものでないと拜察することが出來る。善く射ることと善く受ける事共に中々容易でない。大方は亂射に終り反つて眞風地に墮し、能く解つたやうに思ふて深く埋まり落ちてゐる。

光りの友の集りなどは、既に氣持ちが揃ふてゐる、危いけれどもおひかりに守られてゐて、金的とはゆかないても矢場の埒内に居るが、講演(公會の)となると全くあぶなく恐ろしい。頼まれて行きがかり上話させてもらふても落付かない氣持が多い。それは喜んでもらへる事もある又善い氣持て講

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

じ終り、手答へのある樣な感じのする事もある。併し聽衆の方々の事を思ふと決して落付かぬ。私の話しの蔭には常に若干の托鉢者が守つてゐてくれられる、私は只その托鉢の説明として許される氣持をもつ。又それで托鉢者も活きてくる。私しの話しに原稿はない、唯聽いて下さる人々のお顏を見て話す、娘さん連ならそのつもり實業家ならそのつもり、教育者宗教家それ〱の方々の要求が話させて下さる事になつてゐる。時には各種の人のまへに高等小學校の生徒さんなどが並ぶと一寸まごつく事がある。まごつかなゐでも聽衆の方には御迷惑である。それは話しが總花の樣になりがちであるから。或村に懇請されて學校で話した。紹介した人は非常に村人に感化を與へて、かく〱の事があつたなどゝ、其事實を擧げて迄禮を云われたのに、是と同じ話しをきいた一人の先生は此度のお話しは低級て失望したといふてきた。「懺悔の生活」を書いたとき同人の二三の人は、常にきいた話より調子が低いので遺憾であると心配してくれられた。が、若しその同人の方に話しあつて居つた樣なことを書いたら、あの樣に澤山な人に讀んで貰へなかつたかも知れぬ。普通の講演は只普通の常識に反逆されない程度のものであるを要し、それ以上はその人々の問題と其人に直面しての膝詰めに讓らねばならぬ。禪宗に入室の法があるのも無理はない。

雜誌の文章も矢張同じ事であらねばならぬ、道に少しの秘密もないが、讀む眼と心に差別がある。上下優劣をいふのでなくても機縁の熟否は爭はれぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

これ迄かいたことは話しや文章が人のギリ〳〵の問題に對しては中々うまく當り得ないことをいふたので、是が爲めに功能がないといふのではない。只の賣文でも道理を傳へ、講談物語の樣なものでも人の心を引つけることが出來る。況んや一生懸命に生活を爼上に載せて自分の身から試みようとするものゝ書くことゝ語ることゝ、たとへ語呂はなさなくとも、まご〳〵したことを云ふても、その底に何かの事實を持つてゐる話しや文章は强い。況んや又、行文無澁運舌無邪の人ならば、人を動かし世を益する事頗る多い。古來百家の書、現在東西の獅子吼は、兎に角地上の人類を組織立て活動させる一部の力となつて居る。其偉力は絕大なものであり、その貢献は無量のものである。

多數の人を動かし、常識的訓錬をなすのは、かように言說に力がありながら、何が故に今少し人類の生活が落付け、世界の調和を來らす樣に導けないのかと考へて見ると、常に一番大切な事をとり逃がすからであるまいか。大切な事とは何か。「迷妄から脫する事」である。本來に歸るといふも、悟るといふも、神を見よでも佛にすがれでも何でもよい。私等の所謂「おひかりにかへる」それである。

古人の語に「迷情の四句は四句ともに非なり、悟情の四句は四句共に是なり」とあるそうだが、名言である。「おひかり」にかへつて（悟情）のあらゆる活動は皆共に是であるが、「おひかり」にふれない（迷情）あらゆる活動は皆共に非てある。絕大な偉力、無量の貢献も皆地獄を造る種になつてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

いかに宏大な建築物でも、もし地盤が傾いてあつたらどうであろう、高く積むほど倒れるでないか。近代の文化はそれに似てある。せつ〱と活動して地獄を造り、一生懸命に積み上げて倒ほしてゐる。悪魔に魅られてゐるといふてもよい。

こうした事は多くの人がさけんでゐる。ほんとに識つてゐる人も少くない。眞劍な研究をしてゐる人も澤山ある。けれ共だん〱ゆけば、そこに大きな障碍物がある。悟りに入るには自分を捨てねばならぬ。「おひかり」に歸るにはほんとに無我にならねばならぬ。一寸の座禪、あたまだけの信心、形式丈の捨身、だけてはその障碍物は飛越せない。キリストは「神と寶に兼ね仕ふることを得ず」とかいふていられる。釋迦は「諸行無常是生滅法」の二句のあとを聽きたいと求めた時、空中より「汝の身を前の谷底に捨てよ」と響いたので、「それをだに聽くを得るならば此色身を何おしむべき」とて起つて谷底へ飛び込まれたら、「生滅々已寂滅爲樂」の聲と共に、身は紫雲にまもられてもとの處に据へられたとある。悟つたあとにはあらゆるものを背定して差支はなかろうが、その悟るといふのにはあらゆるものと、自分の心身を捨てる覺悟が必要である。それを捨てゝ飛び越へようとすると、我執の魔が執ねくさけぶ。「死んで花實がさくものか」「いのちあつての物種である」「乞食の眞似しては生甲斐がない」「自分はよいが妻子が困る」「己れだけ往くのは利已的であるまいか」「何といふても金である」とこんな事を數へたてれば際限がないが、手をかへ品をかへて要するに人を棄て身にさせぬことにな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

る。魔は夢をほんとゝおもわす力量を持つてゐる。人をさいなむ爲めには迷はせておくより外はない
人はさいなまれていながらそこを飛び越へない。

「棄てる」といふことは此身を土にするといふ事ではない。土になつてもかまわないといふこゝろである。かまわないは無我である。土にしたくないは慾である。かまわないはするに決つたことでない、またならぬに決つたことでもない。「棄てる」は無我になる事である。「どうなつてもかまひませぬ」となげ出した人が安全で、なげ出せないで力んでゐる人が苦んでゐる事はザラにある。棄て身になつて來た子の爲めに棄て身になれぬ親達が救はれてゐる事實も澤山ある。

今の文化は棄て身になれないおじけた文化であるやうだ。是程澤山生産が出來ても借金はますくふへる。或友人に此頃の新著に世界の生産高と債務の高を列べてあつたものを聞かされた。なんでも世界中の債務が二萬億弗で一年の生産高が五千億弗此内の利益即純生産がその一割の五百億弗であるから、二萬億弗の五朱の利子に當る一千億弗の半分しかないとの事である。大車輪になつて生産しても利子の半分よりないとはみじめでないか。一面に債權者も又地上の人であるから、借り人と貸し人は同じで債權債務は唯帳面上のことだといへばそれまでだが、露西亞へかした二億圓を帳面上のことだといわれて返されないでは、日本も隨分困るであろう。西洋の文化に醉ふてゐる内に、澤山に生産能率をふやしたと思ふ間に、五十億圓といふ國債が我國にも出來てゐる。都會に大きなビルデングが

建つけれどもたとへ外から地震が二度ゆらないでも、内からぐら〳〵することもある。いつか立派に飾つた都會と共に、「かし家」と唐様でかく三代目になるのでないか。教育は盛んになる、けれども學生の犯罪はます〳〵ふへる。棄て身になれない爲めに身と家と國を貧うし亡してゆく現象はあり〳〵と見へる。障碍物の處に蟠居する魔は腹をゆすぶつて笑つてゐる、「おじけものゝ弱虫め」と。

澤山な金を費やして外國迄往つて走りごとに勝つたかとて、又軍艦を何隻かおよがせて、何處かの國を威壓したとて、又それらがいかに生命がけであつたとて、此障碍物を飛び越へることは出來ぬ。外へでなく内へである、物へでなくて心へである。内外もなく、物心もない處へゆくには、執われた外へと物へとを棄てねば飛躍でけぬのである。外面と物質の文明で往きつまりきつた西洋は此頃「光りは東方より」とさけび出してゐるでないか。「東方の光り」とは一體何か、「寂びた光り」のそれであるまいか。「寂滅」の光、それであるまいか。

人間味々々と云ふて往きつまつた生活を、棄て身になつて「おひかり」に觸れ、借金におひかけられる生活を懺悔と奉仕で整理して、一時世間の義理を缺く樣に見られても、諸方から燃え上れる執はれた生活の大火焔を消すことに取りかゝりたい。落付いて悠健で、ひつたり大自然と一つになつた、しかもそこからさわりなく文化をあつかふ「寂滅」の世界が望ましい。

私はこゝに「寂滅」といふた。一寸多くの人には消極に感じられ、めいる樣な氣持のする「寂滅」

の字をわざと用いた。是は今の世の妄生又は盲動に對して、此字で不二をあらわしたい爲めである。此字を用いたいほど今は妄生盲動であるからである。

「光りは東方より」と西洋に求めらるゝに對して、西洋のバタくさいものゝ調合された場當り物を提供して、失望させてはならぬ。思ひきつて大自然から純正に産れたものであるが必要である。それを出すには何の參考書もいるものでない。第一の「根本の悟り」は、自分を棄てることである。まばゆいやうに見ゆる文化はそれはほんの彩色である。體がなければ彩色はない。根本の體のさとりは自分を棄てる事から開ける。生滅をも滅し己つた時、寂滅が現前する。太靜であつて而かも活潑々地な此寂滅、即ち底ひかりする「寂びた光」。こゝから築き上げる自利々他の落付いた文化が必要である。たとへ小さくても此見本を造り上げ、骨組だけでも祈り出して、西洋の「光りは東方より」に答へたい。

かうしたことになるには、まづ自分から「おひかり」に歸らねばならぬ。あらゆる事に流されてゆかぬやうに、ハッキリと地盤を均らし、人間生活の基準を造り出さねばならぬ。それには魂のたてかへもいる。心と身と生活をおひかりにする必要がある。こんな問題になると講演や文章ではとても〳〵金的は射留められぬといふことになる。又どの樣な講演でも文章でもこちらが金的になつて受留めるには、矢帳「おひかり」にふれた心でなければならぬといふことになる。結局おひかりの生活を必要とすることになるのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

私がいつも難有いとおもふことは、直接又は間接にでもおひかりにふれてゐるお人の話しや文章は、たとへそのあらわれかたがどの方面にあろうとも、その根に一つのものがかゞやき働いてゐる事を見ることとである。

同じ様な文章でもおひかりにふれてないと結果がちがつてくる。異なつてゐる様な扱ひ方でも、おひかりにふれてあれば帰趣は一つである。時々此光誌上でも色々にあらわれて光友のお説が出る。或は赤い様な處に入りまたは白い様な處に往く。何一つ敵をも持たず又味方にもならぬ。きわどい處迄よばれてはゆく、併し少しもかぶれはせぬ。正しいことだけは相手と一つになつて間違つてゐる處だけは別々である。外から見る人はそうはゆかぬ、常に文字の末に囚はれ又他の言葉によつて動揺する。

此頃治安維持法案が出た。どこかの新聞に一燈園の天香始め、珠數つなぎになつて引つぱられると書いてあつたとかを讀んで心配した人があると聽いた。何處へでも托鉢にゆかねばならぬ身は珠數つなぎかとてさわぐにもあたるまい。入牢すれば又そこでのおひかりがさす。台中で刑務所の内外を講演によばれた序に見せてもらふた。中々行屆いてあるのに驚いた。園の生活は時には牢獄の生活よりもみじめな處へ托鉢する。罪を感じてこそつらからめ、然らざれば同じことでなければならぬ。又何で托鉢生活が治安維持法にふれるのか、一寸考へたらすぐわかる、敵のない生活、とりあひしなくて働く生活、是が若し治安維持法に觸れたら滑稽である。「人の荷物を持たせてもらふには自分の物を持た

ぬが便利である」。「はたらかせてもらふても自分の物として領したくない」。「無一物中無盡藏である」といふ事と、所有權を否認するといふことゝは大變な違ひでないか。問題にもならぬ事ながら、言葉や文章と外から批評する心との行屆かぬ爲めに、一燈園が妙に一部に見えるのである。

大かた此末一燈園も、人が多くなり友人がふえ、世間に認められ重寶がられるやうになるにつけて、一面に文字や言葉で障りが出來て、とんでもない事が起つたりするかも知れぬ。併しまたそれがさらに大きくなる種にもなることがある。要するに互に金的をはずさぬやうにせねばならぬ。おひかりに歸るのを忘れてはならぬ。言葉や文字の端に動かないで根本の本來をはずさぬやうに、「八風吹けども動ぜぬ天邊の月」の樣に、愚魯のやうに托鉢して内を守り輕はずみせぬやうにせねばならぬ。自省のつもりで此文を書く。

■東京一燈園より　相變らず同人わ忙しくまめに候。『働く者の家』『子供の家』とも谷田部兄の設計にて此程草木がうえられ漸く『家』らしく相成候。●四月十八日若槻内相一行『働く者の家』に御光來あり、下問のまゝに自由勞働者の生活その悲慘を極むる失業狀態など聞えあげ候。●五月十日大婚奉祝に『子供の家』でわ旗行列仕り候。●五月十三日より四日間全國社會事業大會當地に開催。同人一年間に亘る東京府への奉仕になれる『東京府管内社會事業要覽』兎も角も此期に印行されしこと感謝このことに存じ候。調査の不備と印刷の粗漏とわ他日必ずその罪を償うべく、今わ大方のおゆるしを乞うのみに候。●帝都の地、事繁く、道場建立の願も近く具體化されねばならず、放浪と惡酒と過勞とにたふれたようになつた方々に『生命の泉』より一掬の靈水を汲まんとする同志の御來援をひた禱り候。●五月雨の候も近く候。道の爲め折角御加養あらんことを。（松下）

藝術美以上に美しきものへ

『標立つ道』を通して觀たる善と福との一致の信仰に立つてからの倉田百三氏

谷口雅春

一

自分は倉田氏の著作は「出家とその弟子」以來、「處女の死」を除いてその凡てを讀んだ。「處女の死」を讀まなかつたのは、自分の日頃尊敬してゐる友人が、その作の發表された當時、自分の宅へやつて來て、甚だしくその作をセンチメンタルな鼻持ちのならぬ駄作だと評し、大森にゐられた倉田氏の當時の生活ぶりを、傲奢な唾棄すべきブルジョア的生活で、それが全く、貧しき隣人あることを忘却したやうな生活だと評したのを聞いた時、何だかそれが「讀んではならない低卑なもの」と云ふやうな感じを植ゑつけたゝめでもあつたし、當時の氏の論作「轉身」を通して窺つた氏が、大抵如何なるものを書かれるかは自分には大凡推測がついてゐたからでもあつた。

「轉身」以前の氏の著書は震災の際に全部燒いて了つたので、今茲には唯一部の記憶が殘つてゐるだけで詳しいことを引照するなどゝ云ふことは出來ない。然しその中に書かれてゐた「自由戀愛論」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

の如きは、一切の慾望を煩惱と觀ずして善しと觀る當時の氏の如き前提を擧げて立つ以上は、論理的には間違ひがないにして頗る蕩兒的氣分に滿ちたものであつた。その論文には、氏は假りに思想それ自身のために「戀愛」それのみについて考慮し、その他の社會的な關係を假りに拔きにして考へる、若し社會的な複雜な關係（例へば、他人の運命を懸念する如き）を入れて考へるときには又別の結論があり得る——と云ふやうな斷り書きのやうな一節も見出されたが、又、或る箇所には「自分の愛人等」と云ふやうな言葉があつて、二人以上の戀人を氏が當時有してゐるやうなことが暗示されてをり、（これが事實でなければお詫びする。）それを氏の「自由戀愛論」に當て嵌めて考ふる時には、同時に二人以上の戀人を有して好いのは、牡丹を美しと感じながら、海棠の花にも美しさを感じ得ると同樣、全く當然であつて少しも非難すべからざることだと自己辯護をしてゐるやうな、蕩兒的な氣持を氏がもつてゐられることを感じないではゐられなかつた。

二

その後、自分は氏の論集「超克」によつて、氏が「善と福との一致の信仰」に立たれたことを知つた。此の信仰に對しては自分の一友人も酷く貶しつけたし、田中王堂氏なども苛辣に批評されたやうであつたが、自分は氏がこの信仰によつて次第に遷善の過程に進み行かれるであらうことを喜ばずにゐられなかつた。その頃自分は、「死後生活」の存在とその狀態とについて近頃異常に進步し來つたサ

イキック●サイエンス及びスピリチュアリズムを通して研究しつゝあつたので、氏の信ずるやうな「善と福との一致」のあるべきこと、及び證驗によらずして思索によつて其處に到達せられたるこの聰明さについて、それを喜ぶ意味の手紙と、當時自分達の死後生活研究の機關雜誌とを送つたことがあつた。果然、今度、氏から氏の近作集「標立つ道」を惠送されて來たので讀んで見ると、著しく在來の氏とは違つた感じがするのである。

舞臺的技巧などについても大分變化があるが、それは此處では述ぶべきではない。自分が玆に述べたく思ふのは、此の作集に盛られた精神的內容についてゞある。

先づ最初の「光明皇后」に於ては、例の「花見と火事とが同時にある時、吾等は、花見と防火とのいづれを先にすべきか」と云ふ、氏が嘗て「靜思」に於て取扱はれた問題が取扱はれてゐるのである。花見とは、美しきものを鑑賞し享受する生活の比譬である。火事とは隣人の不幸の比譬である。倉田氏は「靜思」に於ては、隣人の不幸（火事）は一生涯かゝつても消し切れないものである以上、花見をしたいと云ふ慾望が與へられたのは此の慾望を捨てるためではなく、火事を消しつゝ、花見をするのが、人間として許された範圍の生活であるとの結論に到達してゐられた。併し此の「光明皇后」なる作を通して窺ふと、氏の此の結論は次第に他に推移しつゝあるやうに感じられる。此の作に於て、「法と天子の權威を保つために、其れに相應しい莊嚴を必要とする」時代の「天皇」及び、「光明皇后」

は明かに、美の建設のために隣人の不幸を顧みてばかりはゐられない「靜思」「及び「轉身」時代の倉田氏の傾向を代表するものである。大佛の鑄造のためには日々十數人の人々が死傷する、それでも彼等は「莊嚴」の營造のために、その死傷を顧みることが出來なかつたのである。然るに第三幕に於ては、此の「天皇」は「わし等の生活はまだ確かでなかつた。わしは空虚を感じる」と嘆息してゐる。「皇后」も「私もさう思ひます。何時ぞや御前を下る時、若し私が必要となつた時には御呼び下さいと申した仙那の言葉が不思議に強く耳に殘つて居ます」と答へる。それで仙那がやつて來る、そして彼は「崩れる可きものが崩れたのです。不滅なもののみを相手とせねばなりませぬ」と答へるのである。「外に築かるゝ美は頹るゝべきものだ」と云ふ此の仙那の答へには、「花見よりも火事をさきに消さねばならぬ」と近頃信ずるに到られた倉田氏の思想があらはれてゐるのではなからうか。それで仙那の言葉を容れたる「光明皇后」は鹿仙泉浴場で、「穢き者」たちの垢をおとすことによつて、自分の今迄の「官能の快美」によつて汚された汚れを償はうとせられるのである。

「凡そ官能から來る甘美のない働きによつて奉仕する時、初めて　陛下の汚れは償はれるのでムいませう。　陛下の誘惑は其處にあつたのでございますから。「かう仙那が「光明皇后」に云つてゐる言葉は「善と福との一致の信仰」に立たれてからの倉田氏が、それ以前の「官能の甘美多き」生活を送られた時代の倉田氏みづからを鞭打つてゐる言葉ではなからうか。自分は此れが唯作品の上での作りもの

ではなく、生活の上でも眞實體行的にさうあらんことを希望したい。

倉田氏の「善と福との一致の信仰」と云ふのは此の世に於て、必ずしも善と福とが一致すると云ふのではないのである。氏はその論集「超克」に於て「我々は地上の生活に於て、善と福との嚴密なる一致の事實を認めることは不可能である」と斷定し、實踐理性の要請として「地上の生活以外に我々の死後の世界を認めて此の地上の生活に於いては、善と福とは嚴密に一致しなくとも、全世界過程に於ては嚴密に一致することを假定するのである。即ち靈魂の不死、來世の存在を假定するのである。かくて善との福と嚴密なる一致を信じて善を追求するのである」と云つてゐられる處を見ると、現世に於て却つて苦しみ多き善は、未來世を包含した全世界過程に於て、福を得るのであると云ふのである。此のことは「光明皇后」なる作のうちには、まだはつきり表はされてゐない。「光明皇后」は鹿仙泉浴場で、穢なき乞食の子供の膿瘡に口をあてゝ膿血を吸ふ——吸ふまでの過程に於ては、それが苦痛であつたが、愈々吸ひ得たときそれは驚くべき快美の感であつたのである。それは現世に於ても善と福とが一致してゐたのである。この「戯曲」だけでは「來世」の必要なる所以はまだ不明である。併し、此の快美の感は藝術的美感以上の美感である。それは體行的美感である。自分は倉田氏が藝術的美感の他に體行的美感のあることに氣づかれたことを嬉しく思ひ、單に此れが作品上の遊戯なるにとゞまらずして此れを機會に、體行的美感を得る如き生活に遷り行かれんことを希望せざるを得ない。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

三

「光明皇后」なる作に於ては、なほ善と福とは現在に於て一致してゐる。苦しき修行は、體行的美感によつて報いられてゐる。併し、來世を露骨に出したのは、その次の作「蕩兒の墮ちる地獄」である。倉田氏はこの作によつて自己の內に潛む「蕩兒的なるもの」を假借なく責罰せんとしたのであると云つてゐる。作の主人公たる蕩兒は、さま〴〵なる幻想的な世界——もしくは幽界——に於いて、それにふさはしき責罰を受けてゐるのである。彼はその世界に於て「魂の安靜と平和」を失つて、それをどこに往つても見出すことは出來ないのである。自分は此の作に於て、大いに變化せる、又は變化せんとせる倉田氏を見出すのである。自分は、嘗て氏の論集「轉身」中における「自由戀愛論」を見たとき、氏のうちに多分に「蕩兒的なるもの」が潛んでゐることを見出さずにはゐられなかつた。併しこの作を讀む時、氏が、あの「自由戀愛論」を草された時と、思想に於て、若しくは氣分に於て甚だしく相異して來られたことを感ずる。先づ「自由戀愛論」に於ては、慾望そのものゝ積極的性質の上から、感じ得る「戀愛」は同時に多數であらうと、これを滿足すべきが「戀愛」そのものだけについて云へば眞理であつたのである。唯、多數の戀愛を同時に充たし得ないのは、人間の地上生活が課するところの制約に過ぎなかつた。寧ろ原則としては（制約なき理想世界に於ては）、複數の戀愛も同時に充たし得て何等の不合理もなかるべきであると云ふ主張が、それには含まれてゐたのである。併

し此の「蕩兒の墮つる地獄」に於ては、複數の戀愛を同時に充たさんとするが如き蕩兒は、假借なく罰しられてゐるのである。しかも、その罰しられる所以が、「他の運命を傷けた」と云ふやうな複數の戀愛を同時にみたす上からおのづから關係して行く、第二次第三次の悲劇に對する責任を負ふために罰しられてゐるのではなく、複數の戀愛を同時に追求するが如き、その「不純」さそのもののために罰しられてゐるらしきところが見えるのである。凡そ移り氣な戀愛はその不純さのために罰しられなければならない——自分は倉田氏が此處に氣のつかれたらしいのを、氏のために喜ぶと同時に、唯、紙の上でペンをもつて自己の内に潜む「蕩兒的なる者」を責罰することのみをもつて足れりとせず、（此れだけでは一種のなぐさみに過ぎない。）その體行の上に於ても、その戀愛生活の純粹さを得るために精進し行かれんことを希望するのである。

四

戀愛生活の豐富と純粹とは一致しない——玆にも人生問題中の最も複雜なるものが含まれてゐる。若し「戀愛」を、倉田氏が嘗てその「自由戀愛論」に於て述べられた如く、肯定するのが本道である所の慾望の一つであると觀ずる限りに於ては、慾望の複雜多樣にして戀愛の相手の數も多數もち、その充足經驗の愈々多種にして豐富なるものほど、その人格は豐富と云はざるを得ないであらう。リップス氏の倫理學はかうした結論に到達する危險があるのである。リップス氏の誤謬については既に自

分は論文集「聖道へ」の中に「リップス倫理學の誤謬」と題して指摘しておいたから、今は述べない。が、「戀愛」は人間が課せられた一つの「試錬の過程」であると今の自分は觀じてゐる。あらゆる煩惱、あらゆる慾望もさうであるが、「戀愛」に於ては、それは一層「試錬の過程」である。これに躓くものは責罰され、これに躓かざるものは淨められて擧げられる。煩惱もしくは慾望は、これを唯單純に遠離するためばかりにあるのではなく、又唯これを單純に充足するばかりにあるのでもない。多くの近代人は簡單に慾望は充足するためにあるのだと觀じ、聖道門の行者はそれは遠離するためにあるのだと觀じ、自分も亦嘗て後者と同じ考へをもつたことがあるが、現在はそのいづれにも偏しない。戀愛はこれを充たすためばかりにあるのでもなく、充たさないためにばかりあるのでもなく、吾等の試錬の過程として、淨めの過程として存するのである。人は戀愛を感ずることを機緣として、隣人に對する愛、神に對する愛、動植物に對する愛、自然に對する愛等を感ずることを覺える、戀愛が淸くして高まれる時には、その人は必ず隣人に對して善を爲さずにはゐられない。隣人に對して善をなすことが戀人の喜びであるやうに感じる。若し、その人の戀愛が淸く高くあるならば、虫一疋助けてやつても、その喜びのために戀人と相抱いて泣きたくなるであらう。戀愛はかうして善を見る眼をひらくが、又美を觀る目もひらいて呉れる。人は戀愛を機緣として、いろ〳〵の美に段階のあることを知り得るのである。精神的の美、肉體的の美――さま〳〵の段階の美がわかつて來るのは戀愛を機緣とし

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

てゞある。(此れらは戀愛の試鍊に躓かざるもののことであつて、すべての戀愛經驗者が、斯く戀愛によつて高まり得ると云ふのではない。何故なら「試鍊の過程」には及第するものと落第するものとがあるべきであるからである。無論永き全時間を通じて、あらゆる人類は及第すべきであると自分は信ずる。自分が只管戀愛を煩惱なりと觀じこれを遠離するのみをもつてよしとした戀愛觀から此の現在の戀愛觀に到達したのは、唯自分の思索によるのではなく、「死後の世界」からの所謂る靈界通信によるのである。自分は短かい紙面に出來るだけのことを書かねばならないので、この戀愛觀の根據となる死後生活の問題を茲に書くことは出來ない。緣のある人には私の近頃の著述「心靈現象と宗教思想」を讀んで頂きたい。)

五

最後に載せられた「蓮池」なる作は、幼兒のかすかなる、それとはわからぬ程な女性に對する懷かしみから、次第に戀愛の試鍊を通して高まり行く一人の男性の靈魂を書いたものである。戀愛が淸く高くあるならば、人は戀愛を機緣として隣人を愛する愛に眼ざめると云ふことを自分は書いたが、第四場に於て、戀愛を感ずる靑年が勞働運動に突進して行くと云ふのは、この心理に觸れたものだと思はれる。しかし此の靑年は勞働運動に突進したために却つて戀人なる令孃に捨てられるのである。こゝに人生の錯輳した試鍊があるのである。彼は或る時は却つて墮落したやうに見えながら、次の向上

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

の準備期にゐるのである。戀愛のみならず、この世なる地上の人生はすべて試錬の世界である——自分はさう信じるが、善と福との一致の信仰に立つてゐられる以上倉田氏もさう信じてゐられるであらうことが此の作に於ては感じられる。此の作は全體を通して頗る來世的の色調の強いものである。最後の場面には、主人公が凍死してゐる吹雪の彼方から次のやうな鎭魂歌が聞えて來ることになつてゐる——

「玉きはる命のきはみ
たゝかひの旅路をはりつ
いざかへれ、我がめぐし子よ
久方の天のそのふに
川邊にはくはし花咲き
おみならは汝を待つらんぞ
とこしへに若きおみなら」

自分は今後の倉田氏の生活を興味をもつて眺めてゐる。

（大正、一四、四、二一）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

筑紫夜話（その二）

——嬰兒の死に直面して——

柳原舜祐

（一）

歐洲の大戰や關東の大震災などに於いて、其の大きな渦の中にあつた人々が、味はれたであらうと思はれる所の、數多くの悲慘なる事實に比したならば、素より物の數でもないことですが、今年の一月と二月と許り、私に對して重苦しい運命の續いたことはありませんでした。昨年暮れも押逼つた三十日に、文子（五つ）が風邪の氣味でふせりましたが、續いて恭子（八つ）も枕を並べて病床に就きました。三十一日の晩には、とう〳〵醫師を招きました。發熱三十八九度の間を上下する兩兒の枕頭に侍して、惱しくも更けゆくしじまの中に舊き年を送り新しき年を迎へました。かくて正月と云ふ心地もせず、慌しく兩三日を送りましたが、幸にして四日、五日の頃に至り、二人とも全快致しまして、ほつと愁眉を開きました。然しあとから考へると、それは續いて起つた大きな悲劇の、ほんの序幕に過ぎませんでした。

（二）

一月十四日の朝まだき、豫ねて身重であつた家内が、異常を訴へましたので、私自身直ちに産婆さんの所に驅けつけまして、まだ就寢中であつたのを皷き起しました。何時もの如くお産は輕く濟んで、産婆さんが辛うじて間に合つた位でした。隣室で呱々の聲を聞きました時に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

は、兎も角重荷を下したやうな心地がいたしました。

所が思ひも初めないことには、嬰兒が輕い兎唇でありましたので、勿論直ちに家内に見せる譯にも行かず、喜びの中に新らしい不安が包まれて參りました。私は是を聞いて一時どきつと致しましたが、男兒であるとの報告を得て、まあ善かつたと思ひました。取敢ず嬰兒を別室に寢かせ、産婦にも普通の手當を與へまして、島井さんや山本さん達の行き屆いた御手傳の中に、其の日は無事に暮れました。殊に嬰兒の全身の發達が普通以上に良好だつたと云ふことは、此の上も無い心强さを與へて呉れました。

營養は主として牛乳に依りましたが、母乳も少しは飮んで呉れるやうに思はれましたので、喜びと、安神とは、いやが上にも高まつて、始めての男子だと云ふので、方々から過分な初着など頂きなどして居る中に、輝かしい數日が過ぎました。

ところが不幸にも十九日の夜になつて文子がまた發熱いたしたのみならず、二十二日の晝には恭子まで二度目の風邪に罹りました。産褥の妻、畸形の嬰兒、兩兒の發熱、殊に文子は暫時も私を放して呉れませんので、富松さんの懸命な努力と、多くの方々の勿體ないほどの御盡力とあるにも係らず、私は殆んど途方にくれて仕舞ひました。

(三)

二十三日の午後、附添のM婦人が來て呉れられまして、一安神致しました。所が同氏は湯が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

冷めていけないからと云つて、嬰兒の湯たんぽを幾重にもぐる〳〵卷いて仕舞はれました。看護に經驗の無い富松さんが、柔順にそれに從はれたことに、素より何の無理もありません。それが直接の原因であつたか、どうかは斷言出來ませんが、時は靜かに私達の上に流れて、恐しき二十四日の朝が參りました。その日の日記には次のやうに書いてあります。

　氷雨が降つて寂しい日であつた。和之(嬰兒)は朝より大層靜であつた。文子のことに注意を奪はれて、何とも思はなかつたが、産婆の注意によりて餘程冷えて居ることに氣がついた。この儘にして置くと、危いかも知れぬと云ふことである。直ちに湯たんぽを三箇に増加して一生懸命に溫めた。井上醫師の所に驅けつけたが、往診中にて不在であつた。已むを得ず同醫院の電話を借りて渡邊醫師の來診を依頼した。歸つて見れば恰度井上さんが廻診に來て下さつた所であつた。引續き渡邊さんも來て下さつた。井上さんの診療を仰ぐことになつた。夕方始めて泣聲が聞えたので、やれ〳〵と胸を撫で下した。

　文子は文子で午後ぶつ通しに耳痛を訴へて已まない。伊藤さんの御親切に甘へて、井上さんから濕布藥を貰つて來て頂いて、夜通し濕布をした。恭子もまだ充分でない。

（四）

　それから後の暫くは、大體に於いて順調に進みました。姉兩兒の風邪も、徐々にではありましたが、恢復の方向に向ひました。殊に二十五

日の夜に、郷里から母と從妹とが來て呉れられましたことは、百萬の援兵を惠まれたやうな心強さを覺え、家の中が急に明るくなつたやうに感じました。私達は全力を嬰兒の保育に集注いたしました。授乳の時間と分量と、湯たんぽの取換は勿論、室内の温濕度等に對しても、特に細心の注意を拂ひました。それがためには、私共の家庭に取つては、贅澤だとさへ思はるゝ最高最低温度のわかる寒暖計をも求めました。お蔭で前に姉兩兒の看護に氣を取られたことのために生じた嬰兒保育上の手落も、大部分は取返すことが出來て參りました。實際私はたとひ如何なる努力と犧牲とを拂つても、その兎唇の手術を完了して、且何處迄も健全なる發育を遂げさせなければならんと、堅く決心して居りました。

（五）

手術は大學病院に御依賴することに決めて居りましたが、萬全を期するために、豫め主治醫の宅診を受けた上で、入院期日などを決定したいと思ひまして、十一日の午後M醫師の來診を仰ぎました。受診の結果に異常も指摘せられなかつたので、其の指定に從つて十九日の午前に入院し、第一外科第七病棟第五室に收容して貰ひました。病院には家内と富松きんとを殘して、私は晝丈け見舞つて、夜分は姉兩兒のために歸宅してやることにしました。

二十三日の午前十一時頃に手術を受けまして、手術そのものは都合よく參つたようでした。今迄分れて居つた上唇が、普通の形に縫合されて歸つて來た時の顏つきと、それから始め

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

て泣き出した時の苦しさうな顔つきとが私の印象からどうしても消えません。生後わづかに四十日、よしや感覺器官が成人の如く發達して居ないとは云ふものゝ、成人すら成し難しとする、手術の苦痛を舐めさせたことに對して、どう申譯してよいか分らない心地がいたしました。戰場からの勇者を迎へるやうな嚴肅な思を以て、私は彼に對せざるを得ませんでした。

その晩は私も病院に泊りました。その上新たに園の松下さんが、托鉢して下さることになりましたので、一入心强さも增しました。翌日の晝過まで在院して、あとを皆樣に御依賴して私は歸宅いたしました。

（六）

二十五日の朝、學校に出勤して、是から敎室に行かうとしました時に、病院から、すぐ來て呉れ、との電話がかゝりました。恐しい不安に襲はれながら、取るものも取りあへず、急いで參つて見ますと、病室の荷物があたふたと運び出されて居る所です。松下さんに尋ねると、赤ちやんがもういけないかも知れません、との返事です。私は仕舞つた、と思ひました。がどうする譯にも參りません。そして嬰兒は靜養室に移されて居るのでした。小さな體が大きなベッドの上に横たへられて、五六人の醫師達が枕頭に待し、一人が人工呼吸を施して居られるのでした。その場の光景を一つ一つ記しつけることは、到底私の爲し得る所でありません。只はら〱と涙ぐんで居る家内に對して、どうなつても取りみだしてはいけない、とだけ勵ましまし

て、親の手でどうすることも出來ない運命の推移を見守る外にいたし方もありませんでした。殘酷とまで思はるゝ十數本のカンフル注射、滋養灌腸、人工呼吸の長き繼續、すべて現代醫術の極致をつくしたものである筈の數々の手當が私が行つてから後、三四十分間も續いたでせう。然しそれから數々の手當も遂に効なく十時二十分と云ふに、全く絕望を宣告せられました。生きてこそ數々の手當も其の甲斐あれ、愈絕望と決しては、それは悉くいぢらしき幼き生命のいまはの際に當りて、その肉體に與へたむごたらしき人間のあさましき所業に過ぎませんでした。あはれ四十有三日のこの世に於ける受難の生涯よ、やがて來ん春の花にも遇はず、夏をも知らず、秋にもあはで、冬日四旬の夢も圓かならず、溘焉として昇天歸幽せるあゝ爾が和之の淨らけき魂よ、私は今如何なる言葉を用ゐて、彼に對する心持を現はしてよいかわかりません。そしてたゞ

苦しかつたらうね

と一語口の中で申しました。

遺骸は鄭寧に綺麗な湯で拭ひまして、今は保温の必要なき體に、暖かに着物を着せまして、柔かに毛布に包んで、兩の手にしつかりと抱きしめて、長い廊下を通つて、家内と共に再び自動車に乘りました。

家に歸れば老母が門に倚つて待つて居て下さいました。床の間の前に、厚く蒲團を重ねて、さながら生きたる者に仕ふるやうに、靜かに休ませまして、改めて物言はぬ小さな顏を眺

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

めました時に、私共の胸は一杯でした。

（七）

金光教の大和先生に御願して、其の晩に移靈祭を、翌晩に納官祭をいたしました。供物、祭壇その他萬般のことに就ては、山田さん島井さんなど光の友の會の同人の方々、八田さん法貴さんなどの園の方々の温い御同情に寄りました。母方の祖母から貰つた布で仕立てた綿入れを着せて、その上に型の如く純白の衣と袴とを着けました。それ迄の間に私達は幾度眞榊の青葉を清水に浸して、堅く結べる小さき唇を濕してやつたことでせう。名殘は永久に盡くべくもあらねど、現し世のならひ、さてしもあらねば、二十七日の朝、神職である所の義弟に、出棺祭をして貰ひました上で、三度自動車の厄介になりました。一度は全治と云ふ華やかな望みに包まれて、再びは重き憂に遺骸を抱き、今は白木の柩を兩親の膝に載せて、同じ道を辿るのでした。雪模樣の空も凍りて、濱風寒く龍燈崎の松に咽んで居りました。あゝ生誕以來この幾十日夜もおち／＼眠らず、骨折り撫はつて參りましたものを、軀であるとは云ふものの、つめたき煉瓦の竈の中に、只一人殘して歸りますことは、何と申しても堪へがたいことでした。翌朝遺骨を取りに參りまして、恭しく祭壇にお祭りいたしました。

（八）

いくら嘆き悲しんで見ても、既に亡くなつて仕舞つたと云ふ嚴肅なる事實は、是をどうする譯にも參りません。然し乍らそれと同時に肉体

の消滅したと云ふことだけを以て、愛するものと私共との交渉の全部が、悉く無に歸したと考へて平然として落着くことは、私共の感情がどうしても許してくれません。私共の意識——それは單に經驗的の意識と云ふやうな意味でなく、先驗的のそれであつてもよろしいのですが——の對象となり得る世界の何處かに於いて、何等かの形に於いて、嚴然として存在して居つて、何等かの方法に於いて、私共の存在と、極めて親密にして溫き不斷の交渉を有して居るものでなければどうしても落着けない心地がいたします。或はそれは私共の理性を充分滿足せしめるやうな論理的證明の基礎の上に立つことは困難であるかも存じませんが、少くともそれは私共の全精神の已むに已まれぬ、抑へんとして抑へることの出來ない根本的要求であると云ふことを否むことが出來ないやうに存じます。

忽然として生れ、忽然として逝ける幼き靈魂の其の生れ來りし眞の意義と、其の只今の眞の行衞とを、私は果してどう考へてよいのでせう。是迄私は親しきものに別れられたる人々の悲嘆哀愁を慰むるに當つて、よく次のやうに申して參りました。逝けるもの自體は、恐らく既に無限絕對の神の愛の中に、又は永劫一味の眞如法界の中に、永遠に完全に攝取せられてあることでせう。從つて私共が人間としての經驗の世界に於いて考へるやうな、迷執や妄想や乃至は不安焦慮と云ふやうなものはさら〳〵存在しないでせう。故に問題は寧ろ殘されたものの側

にあるべきです。故に私共は故人を思ひ起すごとに、故人が既に神の國に於ける榮光の座に安住し、彌陀の淨土に於ける常樂の園に逍遙しつゝあることを確信すると共に、故人の生存並に示寂そのものは、或る意味より見れば、私共がまことの人間として、久遠の生命と、普遍沒我の愛に目覺めるやうにとの、神の示唆であることを深く思ひて、嚴かに自らを修養することを努むるは勿論、更に出來得べくは、進んで故人若し世にながらへなば、當然爲したであらうと思はれることどもを、よしや一部分なりとも、自分の生活の中に現はして行くべきものではないでせうか。約言すれば一面に於ては、自己の精神内容を經驗以上の世界にまで擴げることに依りて、故人と日々相見し、一面に於ては故人を自己の記憶と行爲との中に蘇らしむることによりて、朝暮之に報恩して行くべきではないでせうかと。

以上のやうに語り續けて參りました私は、既往の私の言責に對して、私自身果して堪へ得るや否やを、まのあたり試みられねばならぬこととなりました。

伸ぶべきものを伸ばさなかつた親としての責任は永久に許さるべくもありません。又許されざらんことをこそ、今の場合却つて望ましくも存じますけれども、嬰兒の死と云ふ嚴肅なる事實を通して來る所の正義と愛との前に、柔順にひれふしたいと存じます。

附　記

私は或はそれが嬰兒の死の直接の原因であ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

るかも知れんと思ふことに就いて一言附言し、萬一今後同じやうな境遇に立たれる方の御參考に供したいと存じます。

第一は病室の氣温が非常に低くかつたと云ふことです。何となれば、午後から夜分七時頃迄スチームが通つて居ませんでしたので、私の持參した寒暖計では最低四十七八度を示して居りました。專門家の立場から見れば或はそれでよいのかも存じませんが、どうも素人の考では、かくの如きは病人殊に手術後の嬰兒の如く二重にも三重にも抵抗力の少いものを靜養さすべき場所ではないやうに思はれます。私は入院後始めてそれに氣づきましたので、その事を絶えず心配しながら、遂に取返しのつかぬことになりました。

第二、は外科のお醫者さんが手術其の物に熱心と誠意とを有して居られることに何等の疑をも存しませんが、その他の手當に對して、果して懸命の努力を拂つて居られるか否かと云ふことに不安を抱きましたことです。外科の患者と雖も必ず成人の健康體であるとは限られませんとすれば、內科的疾患の併有者、又は婦人小兒等に對しては、それ相當の細心の注意を要するのは、改めて言ふまでもないことですが、自己の直接任務に急なるの餘り、自然の他の方面(と云へばとてそれは決して輕い問題ではなく、患者自身として生命に關する點に於ては、同樣に重大なる)に對する細心の注意が欠け勝ちではないかと考へたことです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

第三は、大學病院が研究機關であると云ふことは、云ふまでもないことですが、又一面に於いて其の取扱はるゝ對象物が人の生命である以上、それは決して研究の手段に供せらるべきものではないのですが、その邊の事が事實どう云ふ風になつて居るか、一種の不安を感じさせられたことどもです。

かく申し來ればとて、私はそれを以て、病院を非難攻擊しやうと思ふのではありません。それがさうなり、少くともさう思はれるやうになることに就ては、そこには又己むを得ない複雜なる原因の存在することゝ存じます。極言すれば私共人間性の中に存する主我的要素とでも云ふやうなものが大學病院（には限りませんが）なるものを成立せしむる所の色々の人例へば醫師、看護婦、患者、附添人、監督官廳、周圍の社會等のすべての人々の間に、微妙に且複雜に働き且働き返して居るためとも見られるのでせう。つまりは人間なるものゝ深甚なる「業」の一つの現れなのでせう。

とは云ふものの、又私共が自分の生命よりも更に大切なる生命を托せんとするに當りては、念の上にも念を入れて、最も善き場所を求むる義務があると共に、どうしても絕對に完全なる場所が求め得られざる場合に、自己自信の努力と注意とによりて、求めたる場所の不完全を、出來るだけ補ふて行く決心と準備とが必要であると云ふことを、しみ〲と痛感せざる得ませんでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

托鉢を受けて（二）

星　蓮

○うるわしき菩薩子は、光の中に行住して、其日の終るのもしらない。彼等は我々のいたらぬ生活をも默して眺めながら、いやが上にも恭謙の態度にいそしむ。

我々は、なにを供養したか、なに一つ捧ぐるに堪ゆる物なし。彼等は、さぞさみしきことならむ。

時々は、存養上の一助にもと思ふたこともあるが、遠慮した。結局我身のたらぬことが、はづかしくなる。

○歐洲大戰の頃は、十四億圓の債權者であつた我國が、今では差引八億圓の債務者に墮ちた。そして入超の三分ノ一は虚しき飾りの舶來品が占めてゐるとのこと。勤儉奬勵の大宣傳は、先づ菩薩子の姿を看よ。無所有の信行は、やがて、これらの行詰りをも、救ふべき端的ではあるまいか。

○彼等は世上唯物觀の爭奪から目が醒めて、自（おの）づからなる唯心觀にたどりついた。そこに安穩の生活範疇を見出そうとする順禮である。

○各々が所有欲を整理し了れば、光明の中に自由瑩明の安樂境が出現する。此時こそ特權階級も何等の礙りにもならず、スル〳〵と自在の道が開く。總ての道德も宗教も皆この處をねらつて進みつゝある。彼等の無所有觀は、純宗教的である。唯心的平等觀は、物を離れて己れに還（かへ）る。唯物的平等觀は、己れに迷ふて物に還

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

る。齒を以て齒を、目を以て目を償なはんとする處に、絶えざる抗爭が起る。

○障るものは我身なり。家庭を呪ふな、歷史を呪ふな、呪ふべきは我身なり。河流を換へて堤を築く。岸壁幾度か崩れて、又々更に水と鬪ふ。水は緩く導くを、なぜまどろしとするか。急激のはからひは水を逆轉さする。

○鹿ヶ谷の牝鷄が多くの雛を育てる。雛は育つに隨つて個性を發揮する。雞あり、鶩あり、鶩鳥あり、彼等は、陸上にのみはゐないで水に遊ぶ。牝雞の劬勞やいかに。怪我をして歸るあり、叱られて歸るあり。牝雞の涙やかわくまもなし。

○高く大いなる使命を抱いて立て。懺悔の新らしき衣の下に鎧を着るな。現代文明の月を看て、掌中の珠を失ふな。撰ばれたものは、一超人天の導師となれ。しからざるものは、俗諦に安住して、個々圓滿の光を放て、宣光の願行は、己身の彌陀の營める生活である。

○雲や行け、水や流れよ。岫に宿るな、淵に湛へな。障り多き世は、疑もまた多し。されど古人はいふ、工夫純熟すれば到處大悟の機ありと。

半月湖畔舊遊の詩を叙して、ゆく君の俤を偲ぶ。

何處ノ疎鐘カ隔テレ水聞。湖邊ノ十里入ニ斜曛ニ。
只看テ紅葉ニ不レ看レ寺。一鉢歸僧似タリ白雲ニ。

○本號表紙題字　木喰上人眞筆歌集『心願』(寬政十二年)のうちより頂きました。その歌に曰く

世をすてゝよにすてられしほつしんも
佛法僧の光なりけり

天香さんの車ひき

KH生

大正十年八月の或る朝、光を月刊にする準備で、天香さんと私とは一生懸命に仕事をして居ました。頂度その頃は「懺悔の生活」が評判になりかけた頃とて、衣棚は毎日お客樣が隨分見える。その暇を盜んでは纏めて居たのです。所が表の杉本樣の御店から

「天香さん。今朝は店の者が二人病氣でねてゐますんで托鉢に來て呉れはるやうにお賴みしといたんどすが、未だ來てくれはりまへんのや。如何したもんどつしやろ。」

「左樣か。ぢやHさん一寸ひいて來うか。」

萬年筆を置いて無雜作に尻端折つてたゝれた、微塵も物に囚はれない態度！　理智的には分つて居ても四六時中物にこだわつてゐる私は何時もその時の事を思ひまして恥かしう思つて居ります。

×

Aさんが或る時鷄に餌をやりに行かれました。所が鷄は逃げて行きました。Aさんは小鳥にお說敎した聖フランシスのやうに、鷄に接吻してやりたい程の愛を持つて居る意りで居られたのですが、鷄が逃げて行つたものですから大變寂しく思はれました。然し或る日の事、Aさんは鷄を打たうとして、はつと後悔されました。

「前に鷄が逃げたのも當然だ。此の害心があの時にも私の心の何處かに潛んで居たのに相違ない。」

そして思はず合掌して鷄に御詫びされました

×

入園當時此生活は禁欲生活だと思つて居りました。所がだん〳〵やらせて頂いてゐる內に、食べたくなくなれば食べないのが當然だ。見たくなくなれば見る必要もないのだ。それは決して禁欲ぢやない。斯うした體驗が出來て、やつてみなければ分らないとつく〴〵思ひました。

×

「美を愛するは人間本來の性質である。園の生活が存在の理由からとは云へ、一寸枯淡すぎる。美的情緖(?)を今少し取入れる事によつて、生活に濕ひが出來るだらう。」

これも入園當初に抱いてゐた一つの氣持でした所が或る朝托鉢先で下駄を洗つて居ました時

「おやこれも美の創造ぢやないか、眞善美の世界はこゝにもある。」

斯う思はれて、美に對する考察が變りました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

如風來　如風去

住田蓮車

如風來
如風去
垢面蓬頭
路頭之人

道を掃き溝を淨め
村道を走る
飢來つて合掌して立つ
厥房のかたはら

人笑んで狂となし痴となす
痴か狂か
名を問へど答へず
笑つて去る

春風秋雨
人去つて何處にかある
十字街頭また
向背なし

小さき花

一本の小さき花は
お光りの愛にだかれて
悅びにふるふ

野に咲きて
雜草に埋もれて
誰にも知られねば
この世の誰を彼も知らず

こゝろ稚なくお光りと語れば
お光りは彼にぢかにさす

一本の小さき花は
お光りの愛にだかれて
悅びにふるふ

生死輪廻

戀されて
彼女を捨てき
戀をして
われ捨てられき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

男よ
女よ
いと迅速にとび去る
白きかげのごとく

まとひつまとはれつ
すてつすてられつ

あゝ、人の世に
戀は
いまもむかしも
かくてはかなく
生死を追ひて流轉する

蘆の葉

大洋にうかぶ
一本の葦

涯しなき海洋と、そして
限りなき蒼穹だ
何處から來て何
處へ行くと
誰がそれを知らう

風に流され
しぶきに打たれ
大海をさすらふ葦の葉だ
小島にたゞよひつくこともあるが
すぐと亦そこも出て行く

大きな島や小さな島が
一夜に海底に沒する悲劇を見る
大陸の崕が
波に崩れ落ちる無常を見る

悲しい執着だ
海鳥のうたふ輓歌が聽へる
物凄い嵐の呻(うな)りにかき消され乍ら
濱邊の砂に泣き叫ぶ聲は誰だ
昨夜破船した船乘りの
妻とその孤兒(みなしご)だ

大洋にうかぶ
一本の葦だ
島々に生滅の世界の無常を觀つゝ
涯しなくさすらふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

謹告

拝啓　同人機關誌『光』は從來東京宣光社名義にて發行致居候處今度宣光社の組織を改め發行及編輯の事務分擔を左記の通りに變更いたし候間さやう御諒承たまはりたく此段謹告仕候　頓首

大正十四年二月

伊藤猛　西田天香
西田保太郎　小此木渾沌
中桐確太郎　松下吉衛
（いろは順）

京都市烏丸頭小山下總町五
回光社内
發行兼印刷人　西田保太郎
振替　大阪五九八三九　東京五七六七一

東京市本所區林町二ノ七八
編輯人　松下吉衛

附記
誌代は　京都市　回光社へ
玉稿は　東京市　松下吉衛へ

編輯人から

本誌わ一燈園の同人光友の機關誌たると共に、一燈園生活そのものに對する自由眞摯な評壇たる使命を擔いたいと思います。もとよりこれ論を好むがためにあらず、吾等が本願の成就を祈ればのこと。されば、掲載記事に對する異見わ皆さんから腹藏なく發表していたゞき、私共の生活を、この方面からも錬りに錬つて、獨斷論に禍されることのない生命力の漲つたもの、最も嚴正な意味の批判に堪えるものに磨き上げ、人類愛の生活化と社會的正義の確保と兼れて文化諸相の調整とに聊か貢献したいと願つています。（松下）

定價　一ケ月分　金二十錢
一ケ年分　金二圓四十錢（郵税共）

大正十四年五月二十日印刷納本
大正十四年五月廿五日發行（第四十一輯）

京都市烏丸頭小山下總町五
回光社内
發行兼印刷人　西田保太郎

東京市本所區林町二ノ七八
編輯人　松下吉衛

京都市烏丸頭小山下總町五番地
發行所　回光社
振替　大阪五九八三九　東京五七六七一

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

吉田暎二第一戯曲集

疲れた家

定價貳圓五拾錢
紙數三百三十頁
装幀美本箱入

内容
疲れた家　兎と龜
道化　父

此處に納めた四篇は皆自分の習作に外ならないけれども、自分にとつてはどうにもならない問題のみを取扱つたものだ。『道化』では、「藝」と「家」、『父』では「家」と「道」との間の關係を取扱つた。「藝」に入るには、又「道」を修めるには、はたして「家」から出、家を捨てなくてはならないだらうか。それが正しいだらうか。自分にとつては可也大きな問題である。又「疲れた家」では現在の日本の中產階級のだらけきつた姿、無爲と困憊の內にしぼんで行くすがたを、比較的客觀的な立場から見つめさせて貰つた。いづれも藝術としては未熟ではあるだらうけれど、自分として取る態度と立場は今後と雖もこの小さな戯曲集より外へ出る事はないであらう。（著者）

發行所　東京市小石川區第六天町二四　段丘社　振替東京六四六七九番
發賣所　東京市日本橋區元柳町十　青々堂書店　振替東京四一八八三番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN